11 月 5 日のメッセージ

聖書：創世記　3：　1 – 15

「賢くなる」

日本キリスト教団では、11 月第一日曜日を「永眠者記念日」としています。すでに天上にある信仰の先達の、在りし日の姿を偲びつつ、今、地上で生きる私たちが、いかに生きて神の栄光をどう証しすべきかを思い巡らす日です。いつか、私たちも先達同様、神の御許に召される日が来ます。その日までどう生きるのか、決意を新たにする日でもあるでしょう。

未来のある日、私たちは、その時生きている人たちにどう思われたいでしょうか。「あの人は良い人だった。」「優しい人だった。」「皆のために生きた人だった。」やはり、どこかで高評価を期待したい自分がいます。

もし、未来も今のような学歴社会が続いているなら、「あの人は頭が良かった。」とか、「賢かった」という評価も嬉しいかもしれません。

しかし、聖書は「賢い」ことが一概に良いことだとは言いません。むしろ、賢くなることで辛くなることもあると教えています(「しかし、律法によらなければ、わたしは罪を知らなかったでしょう。たとえば、律法が『むさぼるな』と言わなかったら、わたしはむさぼりを知らなかったでしょう。」ローマの信徒への手紙 7:7)。

それは、知らなくても良いことを知ったがために、背負わなくても良い苦労を背負うこともあるからでしょう。だから、人のことを思って「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」と命じられたのでしょう(「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。』」創世記 2:16-17)。

しかし、人間は貪欲です。その思いを助長するかのように、木自らが誘ってきます(「女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。」創世記 3:6)。そして、私たちは賢くなりました。善いことだけでなく、悪いことも知ってしまいました。他者に責任転嫁することも覚えてしまいました(「アダムは答えた。『あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。』」創世記 3:12)。

その結果が今の私たちの社会です。

せっかくの知識は、「自分さえ良ければ」を助長し、格差は大きくなる一方です。

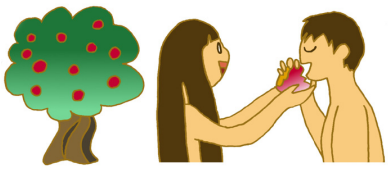
せっかくの技術は、他者の命を奪うために用いられています。

そして、誰も責任を取ろうとしません(「あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。」詩編 51:5)。

そのような私たちを、本当の意味で賢くするために、神は独り子イエスを私たちにくださいます(「神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」ヨハネによる福音書 3:17)。イエスに聞け、イエスに倣え、と教えてくださるのです。イエスは全てを知っているのだから、と。

アダムとエヴァが知識を得たとき、最初に感じたのは「恐ろしい」でした(「彼は答えた。『あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。』」創世記 3:10)。

自分の身の程を知り、神の前に出るにふさわしくないことを知りました(「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。」創世記 3:7)。これが、賢さの原点です。ふさわしくないままでも神が出会い、守ってくださっていることを知ることこそ、真の賢さでしょう。



今、改めて信仰の先達たち一人ひとりを思い起こします。あの人の謙虚さを、あの人の賢さを。

私たちもあの人たちのように賢くなりたいと願うのです。